

宮城・一本柳遺跡

- 1 所在地 宮城県遠田郡小牛田町字新一本柳・一本柳・塩釜
- 2 調査期間 第一次調査 一九九五年(平7)八月～十二月
第二次調査 一九九六年四月～十二月
- 3 発掘機関 宮城県教育委員会・小牛田町教育委員会
- 4 調査担当者 菊地逸夫・山田晃弘・茂木好光・伊藤 裕・菅原弘樹・星 清
- 5 遺跡の種類 集落跡・屋敷跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代・平安時代、中世、近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



一本柳遺跡は宮城県北中央部の大崎低地東縁部に位置し、鳴瀬川左岸に形成された標高約一〇mの自然堤防上に立地する。奈良・平安時代、中世、近世の複合遺跡で、東西五〇〇m以上、南北五〇〇mほどの広がりをもつ。調査は鳴瀬川中流

域堰関連工事に伴うもので、一九九八年度の調査でも木簡が出土している(本誌第二号)。今回報告するのは、これに先立つ第一次・第二次調査で出土した木簡である。調査面積は合わせて約六五〇㎡であり、ここでは両調査の成果を一括して紹介する。

奈良・平安時代の遺構には、掘立柱建物九棟のほか、溝、土坑、小溝状遺構がある。建物は総柱建物を主体とした倉庫群とみられ、八世紀後半から九世紀前半頃までのものである。

中世では、屋敷が五軒(屋敷一～五)見つかった。このうち屋敷一～三はそれぞれ溝で方形に囲まれていたとみられ、屋敷三の溝の南辺では土橋も検出された。また、屋敷一と二は調査区内を東西に走る用排水路とみられる溝を挟んで、南側と北側に営まれており、溝と各屋敷の間は通路となっている。

屋敷の規模は、調査区の制約のため不明なものもあるが、屋敷一が東西約七〇m、南北四〇m、屋敷二が東西七〇m以上、南北八m以上、屋敷三が東西五〇m以上、南北一二m以上である。内部の様子は屋敷一が比較的明らかで、多数の掘立柱建物や井戸、土坑によって構成されている。敷地利用には一貫した継続性が認められ、建物は敷地の中央部西寄りと北側の二カ所に、井戸は建物の周囲に集中し、敷地の北西・南西・南東部は空閑地となっている。建物の配置も規則的で、西寄りに主屋とみられる大型の東西棟、北側に雑舎を並べている。居住者は、屋敷の規模・規則性・継続性から在地領

主程度の武士が想定される。屋敷一と三の内部や居住者の詳細はわからないが、区画の規模から見ると屋敷一と同じようなものと思われる。屋敷一・三の年代は、屋敷を囲む溝や内部の遺構、及び屋敷一と二の間にある用排水路出土の陶磁器類から、屋敷一と二が一五世紀頃、屋敷三が一六世紀頃とみられる。

木簡は溝SD四九から一点、溝SD五〇から二点、井戸SE二二〇から一点出土している。SD四九は前述の屋敷一と二の間を東西に走る用排水を兼ねた水路である。上幅三・五m深さ一・〇mほどで、一九二m分を検出した。木簡以外では多数の陶磁器・かわらけをはじめ、刀子・鎌などの鉄製品、板草履・箸・曲物などの木製品、熙寧元宝・皇宋通宝などの宋銭、板碑の破片などが出土した。陶器は在地産のものより常滑・渥美・古瀬戸など東海産のものが多い。磁器には白磁のほか、龍泉窯系の青磁がある。

SD五〇は屋敷三を囲む溝で、南辺と東辺の一部五三m分を検出した。上幅は三・〇m、深さは一・五mほどある。木簡以外では多数の陶磁器・かわらけをはじめ、石鉢・茶臼などの石製品、折敷・板草履・下駄などの木製品が出土した。陶磁器の内容は前述のSD四九とほぼ同じである。

SE二二〇は屋敷三に伴う直径一・五m深さ一・五mほどの素掘りの井戸である。木簡以外では龍泉窯系の青磁、無釉陶器、かわらけ、漆塗椀、折敷、小刀が出土した。

8 木簡の釈文・内容

溝SD四九

(1) 

(75)×19×4 039

溝SD五〇

(2) 

(184)×23×3 061

(3) 

(156)×24×4 061

井戸SE二二〇

(4) 

縦88×幅5 061

四点とも墨痕が薄く不鮮明で、判読は難しい。(1)は上端左右に切り込みがあり、荷札とみられる。三、四文字分ほどの墨痕がある。(2)は曲物の側板に墨書したもので、五、六文字ほどとみられる。(3)も曲物側板の片面に書かれたもの。(4)は曲物底板の片面に墨痕が認められるものである。

9 関係文献

宮城県教育委員会『一本柳遺跡』I、II(一九九八年、二〇〇一年)

(吉野 武〈宮城県多賀城跡調査研究所〉)



(1)



(2)